



Veritas No.28(2005.4.7)

目次 (敬称略)

<バランスと総合を！——新入生の皆さんへ>

浜下 昌宏 (図書館長)

<特集 新入生を迎えて>

和氣(直田) 節子

横田 恵子

森永 康子

津上 智実

宮崎 麻耶

大西 美穂子

<研究室から>

Janice H. Harris

<ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (1)>

松村 昌家

<図書館からのお知らせ>

無断転載を禁ず

<バランスと総合を！——新入生の皆さんへ>

浜下 昌宏 図書館長 総合文化学科教授

春です、桜です。2005 年度入学という新入生の皆さんが岡田山に上がります。神戸女学院大学の理念のひとつであるリベラル・アーツの一翼を、図書館関係者もまた担う努力をいたします。図書館のニュースレターもご愛読願います。さて、ご入学早々ですが、さっそくメッセージを贈りましょう。テーマは、リベラル・アーツの精神を含んで「バランスと総合を！」としてみました。さて、皆さんのみならず私たちの誰もが、日々の生活や態度決定の二者択一の場面で決断に迫られます。イラク戦争ではブッシュかサダム・フセインか、選挙では自民党か民主党か（公明党、共産党、社民党などもありました）、竹島か独島か（あの不幸な小さな島）、はたまた、親に反対された結婚で彼氏をとるか親に従ってあきらめるか・・・（これは深刻）。ヘラクレスが徳への向上心と快樂の誘惑という岐路で悩むのとは比べ、ことはそう簡単でないことが多々あります。しかし、最終的な行動にいたる決断の前に（それはときに賭けのようです）、可能な限りの情報を集め、冷静な判断の準備が必要です。一方的な情報ではなく、反対側が発信する情報も入手する努力が求められます。つまり、バランスのある知識、バランス感覚こそが、今日のような先行き不透明で複雑で混迷を深めている時代には必須の課題であり、それこそが教養が試されている、ということでしょう。では、そもそも「バランス」とは何でしょうか？ 強い者には媚び弱そうな者には威張る・・・そんな卑屈な態度はむしろバランスとは言わず、ただの卑屈な態度に過ぎません。「対話と圧力」というのは相手国に対する政治的な対応ですが、人格的対応とはまったく違います。かつてスコラ哲学の訓練では<sic et non>（賛成と反対）のそれぞれの立場から議論を立てることが課されました。そのやり方は今日では模擬討論的に大学の授業や学生同士の議論の練習方法として取り入れられています。中東問題に関しても仕掛け人であるアメリカ側のニュースのみならず、カタールより発信される中東の放送局アル・ジャジーラにも目を向けるといいでしょう。英語版のサイトは <http://english.aljazeera.net/HomePage> です。また最近では竹島と歴史教科書問題で日韓のメディアは熱くなっていますが、韓国側の伝え方も、『朝鮮日報』の日本語版 <http://japanese.chosun.com> などで容易に知ることができます（ついでに関心のある向きにはヨン様の最新情報も）。私たちの歴史的知識に関しても、たとえば源平合戦はいつのまにか色男の義経伝説を作り上げましたが、『平家物語』は敗北し没落する側の悲嘆を描いていますが、東国武士・源氏側からは『源平闘諍（とうじょう）録』上・下（講談社学術文庫）が残されています。また、明治は日本近代の幕開けとして、ある意味で私たちが今日享受しているような豊かさの基礎作りに成功した時代です。司馬遼太郎が描く幕末から明治にかけての英雄的精神の高まりは魅力的ですし、鏑木清方が回想する世相にも情緒があります（『明治の東京』岩波文庫）。しかし、急激な発展は取り残された者をいっそう

悲惨にしたことも歴史的知識として必須でしょう。細井和喜蔵『女工哀史』（岩波文庫）、松原岩五郎『最暗黒の東京』（現代思潮社、1980）、横山源之助『日本の下層社会』（岩波文庫）など、内容は暗くはあっても私たちが直視すべき記録は読むべきです。（そうした本を概説する立花雄一『明治下層記録文学』（ちくま学芸文庫）は便利です。）西洋史でも、ピエール・クルセル『文学にあらわれたゲルマン大侵入』尚樹啓太郎訳（東海大学出版会、1974 原書 1964）などを読むと、ローマ帝国へのゲルマン侵入の際の移住・略奪・亡命・暴力・帝国の崩壊、等々の経緯が双方の激変の経験として見えてきます。近代を拓くきっかけともなった十字軍は、キリスト教史の側では正義の戦いとされます。しかし、攻め込まれたアラブ側の困難に私たちの想像力は働いているでしょうか？そんなとき、アミン・マアルーフ『アラブが見た十字軍』牟田口義郎・新川雅子訳（ちくま学芸文庫）は、今日なおキリスト教西洋国家と対決するアラブの人たちの不信と敵意の原点が理解できるでしょう。こうしてみると、私たちの知識や認識がいかに一方的で偏向しているかに気がつきます。そのような立場からの議論や理屈がいかに説得力に欠け、粗暴かつ暴力的であるかを、無自覚なのは無知な本人だけでしょう。リベラル・アーツの教養がより普遍的立場からの良心を育てるのは、バランスある知識、そしてそれに基づく総合によってなのです。皆さんの追究心に期待します。そのために図書館はお役に立ちたいと願っています。

<特集 新入生を迎えて>

新入生の皆さんへ

和氣(直田) 節子 英文学科助教授

新入生特集号に執筆を仰せつかりました。やはり、出だしは、「皆さん、ご入学おめでとうございます。図書館を上手に利用して、ひた向きに色々なことを学んでください」と、型どおりの言葉で始めないと格好が付きませぬので、お許してください。でも、本当に図書館では、その気にさえなれば、色々な体験学習ができます。本学学部生の4年間そして大学院生としての5年間での、私の図書館内ならではの体験学習を少し書かせていただきます。

丁度、私が学部生のときに新館図書館ができました。新館にはコンピューターによる情報検索が導入されたものの、当時はまだ、所蔵書籍情報のインプットが並行して行われていました。そのため、修士論文に取り組んでいた頃は、新館でのパソコンを用いた検索と、

本館のカタログボックスに収められたカードをめくっての手作業での検索を両方行っていました。でも、なんとなく、大学入学当時にガイダンスのあった本館図書館への親しみは続き、よく空き時間に本館2階や3階ギャラリーに友達と、または一人で行って、課題や、授業の準備をしていた記憶があります。本館図書館では、無数の本が、まるで、雑念まで吸収してくれるようで、独特の静寂を味わえました。天気の良い日には、開け放たれた大窓から、中庭の噴水の音や鳥の音が風に運ばれて聞こえてきたりもして、「これこそ女学院で学べる幸せ！」と、そのまま、ばたんと机に伏せて寝てしまった平和な思い出も多々あります。本のない電子図書館では味わえない、図書館という ” 本のおいのする空間 ” から感覚的な刺激を受けて生まれた、まさに全人的経験です。

なんといっても図書館では、想像力が刺激され、独特のゾクゾク感を味わうことができました。勿論、研究者としての今も、です。このゾクゾク感は、検索したお目当ての本が貸し出されずに在ったときの、ほっとした気持ち、偶然これぞと思える本が「書棚からぼた餅のように見つかった！」といった感謝の喜びの気持ちに加え、「えー、読んだほうが良さそうな本がまだこんなにあるんだ」、といったがっくりの拒絶感に焦りといった、喜びと悲しさの交錯した複雑な心境です。でも、この感情が共にレポート書きに追われる仲間（今は友達から学生さんへと変わりましたが、）への愛隣の気持ちやら、「我慢してとにかくやってみるぞ」という気概を生んでくれています。

このような図書館という独特の空間でこそ体験できる気持ちは、そのときの考え方や、心の状態に即して生まれる感情ですので、とても他人様に説明し、「あなたもこんなときに、こうすると体験できますよ」と説明できる類の感情ではありません。ただ、時間的余裕があるときに、図書館に行くと、突然、不意に感じるもの、としか言えません。でもこのゾクゾク感こそ、IQ も EQ もともに高めてくれて、私たちのポジティブなやる気を支えてくれる崇高な感情だと思っています。それは、東北大の川島隆太教授がいわれる、前頭葉の一番前の部分の「前頭前野」で司られている、俗に、理性の働きと呼ばれるものを支える感情といえるのではないのでしょうか。

図書館で無数の本と対峙して感じるゾクゾクは、われわれの感性、知性と共に、道徳観、宗教観も知らず知らずのうちに高めてくれる感情、つまり、良い行いを実践しやすくしてくれる感情であることは確かです。それは、その場限りの感情ではなく、我々の知的、道徳的成長のダイナミズムを支える感情です。もっと大げさな言葉でいえば、本から得た情報を一時的で閉塞的な単なる” book-knowledge ” で終わらせずに、自らの成長のためのメソッド探しに活かせるように導く感情です。様々な知識を統合して、” 次の第1歩を美しく飛び出すための最適な方法 ” を考える後押しをしてくれる崇高な感情のようです。図書

館で過ごす時間の集積は、他者と交わる面白い世界を見つけるための“自分だけの方法”を体得できるように導いてくれると、私は経験をとおして感じるようになってきました。

図書館内で、資料と取っ組み合っている回りの仲間を気にしながら、閲覧本にさっと目を走らせて重要そうな箇所を見つけ、付箋紙を貼り、精読し、ノートにまとめながら、レポートに引用できそうな箇所を書き写す作業は、自由時間を自分の気持ち次第で作りだせる学生時代が一番適しています。新入生の皆さん、クラブ/サークル活動やアルバイトの前後には、図書館で過ごす“脳力”と行動力アップの時間を積極的にとってほしいと思います。図書館での自分だけのソクソク体験を学生時代の思い出のひとつに加えて卒業してほしいです。楽しく効果的に知識を増やし続けることへの自信と、多様な情報に勇ましく立ち向かえる”自分だけの方法”を図書館の底力をかりて是非、見つけてほしいと願っています。

図書館探検のおもしろさ

横田 恵子 総合文化学科助教授

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。大学生活が高校生活と異なっている面はいろいろありますが、なんと言っても最大の違い（そして最大の楽しみ）は、「勉強すること」の意味の転換にあります。

今までの皆さんにとって「勉強」とはどんなものだったでしょう？「先生に言われてさせられるもの」でしたか？あるいは、「あとで親に文句を言われぬように」、「試験をうまく突破できるように」・・・などなど。

しかし、大学における「勉強」はそうではありません。それは「探検」なのです。その探検の最大かつ最上のフィールドが図書館です。

大学図書館には、すべての蔵書の本棚に置いて、入館者が手にとって眺める事が出来る蔵書方法と、図書カードやweb上の検索システムで読みたい本を絞り込み、図書館カウンターにいる係の人にその題名を言って書庫から取ってきてもらう蔵書方法があります。近年は、前者の方法、つまり、全蔵書を開架式で公開する大学図書館が増えているようです。

本を探す営みが「探検」になるためには、やはり開架式がいいなあ、というのが両方経験してみても私の感想です。なぜなら、図書館に行く場合、初めから読みたい本が決まっていって借りに行くことばかりではないし、それに「はい、これ」と言って一冊だけ手渡されるのであれば、書店で取り寄せ本を買うのと何が違うの？って感じですよ。何も予想外のことが起こらない。つまらない。

実は図書館というところは、「うまく言えないけど何となく探しものがある気がする」時に訪れると良い場所なのです。左右にところ狭しと並んだ本の背文字を眺めながら、迷路ゲームを楽しむようにあてもなく歩くのが良いでしょう。そして、何となく気になるタイトルの本の前で立ち止まり、パラパラと中を見ては書架に戻し、ついでにその近くの本も見てみる……。これを繰り返しながら歩いていると、頭の中でとめどなく雑念も沸いてきます。興に乗ってくると1時間くらいはすぐに経ってしまうかも。

え？そんな事をして何になるのって？・・・いえ、一見意味がないように思えるかもしれませんが、実は、知的でスリリングな探検の始まりは、こんな感じで幕を開けるのです。誰のためでも、何のためでもなく、あてもなく何かを探す行為。探している、求めている、という自覚だけは強くある行為。そのうち、自分が頻繁に立ち止まる書棚が出来るでしょう。そうなれば、そのあたりから2、3冊抜き取って、閲覧室に持ち込み、ちょっと眺めてみるといいですね。何も最初から借りなくても良いのです。まずは何度もぶらっと立ち寄り、書庫の匂いや静寂、並んだ本の表情に慣れ親しむこと。そこから探検は始まります。そうそう、最近では、コーヒーを飲んだりケーキを食べながら本を閲覧出来る大学図書館もあるんですよ（＝残念ながら、女学院図書館ではありませんので、念のため）。

図書館に行ってみよう

森永 康子 心理・行動科学科教授

「図書館に行ってみよう」と呼びかけるわたし自身が、実は、あまり図書館を利用していません。しかし、本を読まないというのではない。鉛筆やラインマーカーを手に持ち、「これは使える」「おもしろい」と思ったところに、線を引いたり、文字を書き込んだり、あるいは、ページを折り曲げたりという読み方をしているので、図書館の本は利用できないのである。幸い、わたしには研究費や給料があるので、本が買える。しかも、本を読むことじたいが仕事でもある。それゆえのぜいたくな読み方であろう。

学生のみなさんの中には、そんなぜいたくな本の読み方ができない人もいるだろう。そういうときには図書館に行けばよい。ただ、図書館の本は、線を引いたり、ページを折り曲げたりなどという読み方はできない。だから、重要と思うところは、何の本の何ページにこんなことが書いてあったというメモを作ればよいだろう。わたし自身も、過去にはそんな読み方をしていたし、そのために1日のほとんどを図書館で過ごしていたこともある。

とは言え、これは、あくまで勉強や研究のための読書。そもそもまじめな本ばかりを読む必要もない。小説やエッセイなどは、通学の電車でも、ベッドの中でも、手軽に読めるはずだ。雑学も増えるし、時間つぶしにもなるし、あるいは他人の存在を忘れたいときに一人の世界に入ることもできる。自分で本を買うつもりのない人は、図書館に行ってみよう。おもしろくなければ途中でやめたっていい。気に入れば、書店で買えばいい。

なんと言っても、図書館の本は、みなさんや代々の先輩たちが大学におさめたお金で購入されたものである。図書館に限らず、学内のいろいろな施設の多くは、過去130年の先輩たちの納付金が主な財源となって作られたものだ。「わたしたちの授業料はどこに使われているのですか？」と尋ねる前に、「授業料の元を取ってやろう」というどん欲な態度で、ぜひ大学の資源を積極的に活用してほしい。「大学」というのは、単位をとって卒業するだけでは、もったいない場所なのである。とりあえず、図書館に行ってみよう。

図書館のお話（イタリア編）

津上 智実 音楽学部教授

新生生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

在校生の皆さん、ご進級おめでとうございます。

皆さんにとって、図書館はどんなところですか？受験勉強に通ったなという人もあるでしょうし、あまり行ったことないなという人もあるかも知れませんね。

私は西洋音楽史、それも古いところを専門にしていますので、よくヨーロッパの図書館のお世話になります。今日は、今年の3月に訪れたイタリアの図書館について写真付きでお話したいと思います。

まずは私のメインの図書館、ヴェネツィアのジョルジョ・チーニ財団の図書館について。

私はここ数年、16～17世紀に活躍したイタリアの作曲家クラウディオ・モンテヴェル

ディがどのような経緯で現代に甦ってきたのか、死後忘れられていた作曲家が19世紀末から掘り起こされるようになったその経緯を調べています。その関係でよく訪れるのがヴェネツィアのジョルジョ・チーニ財団の図書館です。



写真1 サン・ジョルジョ・マッジョーレ島を望む



写真2 ジョルジョ・チーニ財団への入り口



写真3 閲覧室の入り口

場所はヴェネツィアでも一等地、サン・マルコ広場のすぐ向かいのサン・ジョルジョ・マッジョーレ島にあります。向かいと言っても海を挟んでいますので、水上バスに乗って渡っていくことになります。写真1は、サン・マルコ広場から撮ったサン・ジョルジョ・マッジョーレ島です。真ん中の白い建物がサン・ジョルジョ・マッジョーレ教会、その右手の茶色っぽい建物の中に図書館があります。

写真2の中央が、チーニ財団への入り口です。実はここがなかなかの鬼門で、守衛さんががんばっていて、予約した部門の秘書に電話して直接確認が取れるまで決して中に入れてくれません。ここは私立で、公立ではありませんから、毎回、仕方ないなあと思いつつ、ひたすら待ちます。

ようやく中に入りました。回廊を回って2階に上がると、長い廊下が続いています。写真3の左手に写っているのが、閲覧室への入り口です。左手の木のロッカーに荷物をいれ、右手のクロークにコートを掛けて、閲覧室へ入ります。



写真4 閲覧室



写真5 17世紀頃の版画に見る閲覧室



写真6 戦時中の閲覧室

いよいよ閲覧室です。写真4は閲覧室を入り口の方から撮ったものです。両側には背の高い本棚が並び、がっしりした木の机と椅子が向かい合わせに並んでいます。資料を出してもらって、この机で仕事をします。

このチーニ財団の建物全体は、かつての修道院を転用したのですが、修道院の昔から、ここの閲覧室は学者仲間には有名な存在だったそうです。17世紀頃の版画が残されていますが（写真5）、今の様子とほとんど変わりません。

とはいえ、長い歴史の中には暗い時代もあり、この美しい閲覧室が武器庫として使われていた時期もあったそうです。その写真（写真6）を初めて見た時には、とてもショックでした。ケースに納められてずらっと並んでいるのは銃です。こんな時代は二度と来てほしくないと思います。閲覧室は戦後、復元されて現在に至っています。



写真7 教会の塔から



写真8 ミラノ国立図書館の入り口



写真9 ミラノ国立図書館の検索室



写真10 ミラノ国立図書館の閲覧室

最後に、隣の教会の塔に上って、上から見下ろした景色（写真7）を見て頂いてヴェネツィアを終わりにしたいと思います。手前の、回廊にぐるっと囲まれた四角が二つの建物がかつての修道院、現在のチーニ財団です。四角の中庭が二つありますが、その間に挟まれた部分が閲覧室です。ここで9時から5時まで仕事をするのが、ヴェネツィアでの私の日課です。

次に、今回初めて訪れたミラノ国立図書館を簡単に紹介します。写真8は、入り口を入れて振り返ったところです。右手の机のところにいる係の人に申請書を出して、入館の許可をもらいます。ここは公立の図書館なので、身分証明書（パスポート）があれば誰でも入

れます。ほれほれするほど立派な図書館です。

許可をもらったら、検索室（写真9）で資料の請求番号などを調べます。カード・ボックスや検索用のコンピュータが並んでいるのは普通の図書館と変わりませんが、部屋の雰囲気そのものに圧倒されます。ここの図書館は館員がみな親切で、とても気持ちよく仕事をすることができました。

請求した資料は、閲覧室（写真 10）で渡されます。この閲覧室は四面がすべて本棚で埋め尽くされていて、立派な本がずらっと並んでいます。知の蓄積に対する誇りをひしひしと感じさせる空間です。

ヴェネツィアにしても、ミラノにしても、歴史と誇りを感じさせる立派な図書館でしたが、我が女学院の図書館はどうでしょうか？

実はこれがなかなか立派なのです。皆さん、図書館の本館をご存じですか？新入生の皆さんは知らなくて当然、在校生の中にもまだ入ったことがないという方がいるかも知れませんね。高い天井には軽快な装飾が走り、どっしりとした立派な机と椅子、窓からは中庭が見下ろせて、とても素敵な空間です。落ち着いて本が読めて、きっとお気に入りの場所になると思います。ぜひ一度、足を運んでみて下さい。



図書館本館閲覧室

『場』としての図書館

宮崎 麻耶 総合文化学科 2年生

まずは新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。

図書館を使う機会は資料を調べたりするだけだということもありましょうが、まずは用事も何もなくとも、ふらりと訪れてみてはいかがでしょう。広く取られた開架、備え付けの机と椅子、雰囲気だけでも勉強する場としては最適だと思います。

神戸女学院大学を卒業されて立派に働いている先輩がこうおっしゃいました。

「大学生活にもっと勉強しておけばよかった」と。

この間お会いしたときも「今が一番いいんだから、今のうちに勉強したほうがいいよ」と言われました。環境に恵まれているんだから、と。

確かに、大学の環境は抜群にいいでしょう。居心地はいいし、ゆったりとした時間が味わえるし、自由であるし。ですが自由ということを裏返せば、自分が何とかするしかないのです。誰もあれこれこうしろと言いません。自分に一任されているのです。能力を伸ばすも何もせずに時間を浪費するも自分の「自由」なのです。

本を読むということは、自分を成長させる糧だと思います。ですが本を読むことが苦手という方もいらっしゃることでしょう。それでも、本に囲まれている空間に身をおくだけでも、随分と変わるのではないのでしょうか。

自分を伸ばすためにも、まずは自分に合う環境を探してはいかがでしょう。その点、図書館はうってつけだと思います。

勉強するにも、本を読むにも、考え事をするにも。

とりあえず、訪れることから始まります。ぜひ自分の目で見て、雰囲気を感じてみてはどうでしょうか。

図書館で過ごした日々

大西 美穂子 英文学科卒業生

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。大学は出逢いの場でもありますが、人との出逢いがあるように、本にも出逢いがあります。

図書館はよく利用していました。理由は簡単。本が好き。読む事はもちろん、ページをめくる音や紙の手触り、「本」そのものが好きなのです。岡田山のキャンパスで文学の世界に浸る幸せを在学中も感じていましたが、大学での4年間はなんて贅沢だったのだろうと卒業した今もそう思います。

1・2回生の頃は主に授業の予習やレポート作成のヒントになる本を探しに利用していました。あとは自分の興味が赴くままに、館内を探し歩いていました。そうしているうちに、本の置き場所を覚えていきました。パソコン検索ではキーワードの組み合わせで検索結果が異なる事も知りました。図書館に置いていない本は投書できます。禁帯出の本もオーバーナイトであれば貸出できますし、相互利用もあります。どんどん利用していただければと思います。

卒論で扱った作品とは3回生の時に出逢いました。なぜこんなにも惹かれるのか、そのときには漠然とでしかわかりませんでした。その理由を見つけるためにも、卒論はこの作品にしようと決めました。しかし、ただ好きだけでは卒論は書けません。図書館に籠ることが最も多かったのは4回生の時でした。テーマを決めるのには苦勞し、何度も行き詰りました。結局、前期が終わる直前までかかりました。専門図書を多く利用するようになって、ようやく「大学」図書館の意味がわかりました。卒論では自分の主張を裏付けるため、証拠となる参考文献が必要でしたが、大学図書館だからこそ、見つけられた本ばかりでした。卒論を書き上げることができたのは先生と図書館の御蔭です。

よく晴れた日の本館から中庭を眺める度に、新館で本に囲まれて探していた1冊を見つけたときに、ここで学べてよかったと心からそう思います。神戸女学院大学の図書館は私にとって大切な場所です。今までも。そして、これからも。

<研究室から>

IN PRAISE OF LIBRARIES AND THE STUDY OF WORLD LITERATURE

Janice H. Harris Megumi Visiting Professor of English, Professor of English,
University of Wyoming

Against the grand follies created by human ambition, surely libraries stand out as a comforting exception. From the ancient West African library of Timbuktu, Mali, created to save texts of Islam on leather, to the current Kobe College Library, created to give us instant access to much of the world's knowledge, libraries are indeed symptoms of human ambition. However, what they yield is the very opposite of foolish.

My memories of the Kobe College Library over this past year comprise a blend, but they each begin with walking in to the library and being greeted by members of the friendly and efficient staff. Domo arigato. Responding to the kind invitation of the staff, my junior level "Advanced Writing" class met there one morning last May to be introduced to KC Library's vast storehouse of available knowledge. As we sat facing our computer screens, the workshop leader showed us the magic within the machines. Knock here and this door opens. Knock there and another door opens. Suddenly we found ourselves in the stacks of the British Library. Magic. I recall asking if we could see whether the KC Library has Bruno Bettelheim's great book on the psychological impacts of fairy tales on children's minds, especially children with psychological problems. In an instant, up came Bettelheim's book, *The Uses of Enchantment*. Enchantment indeed!

A different kind of memory is more old fashioned. From the time I was very young and just learning to read, I have loved being in a library. Whether I am reading, writing, or perhaps grading papers, the atmosphere invites me to concentrate. At the KC Library, I found myself drifting over to the windows that overlook the Shakespeare Garden. There I would correct student papers, look up and watch one of the garden cats, turn back to student work.

I also drifted up there simply to read, and in particular, to read such novels as Tanizaki's *The Makioka Sisters*. And that brings me to the topic of "World Literature." As all of us struggle with the best way to help our students develop intercultural awareness and understanding, I hope we will keep great literature deeply embedded in the curriculum. Why? Let me try to explain.

Judging from what I have read, when the Japanese opened their doors to outsiders during the latter decades of the 19th century, many took crash courses in western languages. Of course, they learned what they needed to learn: the languages of trade, politics, and negotiation. But some of the Japanese who became proficient in English began to read Dickens, Hardy, Eliot, Hawthorn, Thoreau, and Cather. "What?" they said. "These big, blunt, loud Brits and Americans can ache with longing, feel guilt and anxiety, cry over loss, laugh at themselves?" As my students and I have been reading short stories and novels from South Africa, India, England, and American minority writers, we have experienced the same opportunity for insight. What on earth could have been going on in the mind of a thoughtful Afrikaner during the decades of apartheid? How might the unfolding of each day have looked to a young untouchable in rural India during the 1930's? Literature, anywhere and anytime, can tell us. Literature functions in highly sophisticated ways, but on one important level it gives the reader an imaginative entree into the bedroom, bathroom, and kitchen of the other. We get to go backstage, to slip into the intimate spaces of someone else's house and mind. Once there, we can listen and learn.

Given my class assignments in Kobe College's "Global Studies" program, I've been teaching a wide range of literatures, but in my spare time I have been concentrating on Japanese literature, in translation alas. During the first weeks, I dived into Tanizaki's *The Makioka Sisters*. As the readers of this newsletter will know, it is a long family chronicle, set between 1936-1941, in a neighborhood quite near Nishinomiya. "Ah so," I said as I turned the pages. "Ah so." All the cliches and sound bites about traditional Japanese family dynamics and gender relations fell away as Tanizaki generously and leisurely detailed the shifting complexities of the Makioka marriages, sibling relationships, infidelities, and friendships. Among the most vivid scenes of friendship are those he creates between the children of the Stoltz family and young Etsuko Makioka. Mr. Stoltz and his family are on a three year business assignment in Kobe, renting a house

adjacent to the Makiokas. The children grow fond of each other. When the Stoltzes are recalled to Germany, the families write letters that are initially optimistic but ultimately heart breaking. “Ah so,” I say. I understood the history of Japanese/German national alliances. But I’d never thought of the people becoming friends.

In the ensuing months, I have been reading ancient epics, medieval and modern novels, poems, plays. During this time of regime toppling by American forces in Iraq, among the most haunting has been a 9th century poem by Sugawara no Michizane, “To comfort my little son and daughter.”

Goodness knows, studying literature is only one way to learn about life in other times and places. Equally necessary are the data and analyses of philosophers, intercultural studies scholars, linguists, sociologists, political scientists, anthropologists, and historians. And goodness knows, literature is not a neutral or transparent representation of anything. Every act of representation is informed by the complex interplay of genre, audience, means of production, authorial agenda. But those very elements simply lead us forward. Who was Michizane no Sugawara? Why was he exiled? Why did he write in Chinese? Who was he writing to? To say that he was eventually deified as the tenjin of calligraphy and scholarship means what? One can go to the library, literally or figuratively. One can find out; one can learn.

To Comfort my Little Son and Daughter

Michizane, a high official, was forced into exile. All of his twenty three children were detained or sent to different places except the two youngest, who were allowed to accompany their father to Kyushu. *Anthology of Japanese Literature, Volume One*, ed. Donald Keene (p. 165).

[N.B. Unfortunately, neither Keene nor the scholars I’ve read give information on Michizane’s wife. The Heian period (794-1185) is generally seen as a time of opportunity and empowerment for Japanese women of the upper classes. Perhaps she did not bear all 23 of those children nor suffer his fate. JHH]

Your sisters must all stay at home,
Your brothers are sent away.

Just we three together, my children,
Shall chat as we go along.
Each day we have our meals before us,
At night we sleep all together.
We have lamps and tapers to peer in the dark
And warm clothes for the cold.
Last year you saw how the Chancellor's son
Fell out of favor in the capital.
Now people say he is a ragged gambler,
And call him names on the street.
You have seen the barefooted wandering musician
The townspeople call the Justice's Miss -
Her father, too, was a great official;
They were all in their day exceedingly rich.
Once their gold was like sand in the sea:
Now they have hardly enough to eat.
When you look, my children, at other people,
You can see how generous Heaven has been.

Sugawara no Michizane (845-903)

<ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション 1. ディズレイリ ― 人と作品>

松村 昌家 大手前大学大学院教授

図書館の井出敦子さんから、図書館蔵のベンジャミン・ディズレイリ・コレクションについての寄稿の依頼を受けた。これには理由がある。

かつて1972年から85年までの神戸女学院勤務中に、図書館の一層の充実を図るべく、ヴィクトリア朝文学・文化に関する研究資料の蒐集に力を注いだことがあった。幸いに図書館の方々が、それに全面的に協力してくれたお陰で、相当の成果を収めることができた。よそから見て羨望の念を抱くようなものも数々ある。ベンジャミン・ディズレイリ・コレクションはその中の代表格だといえるだろう。これ入手する過程にもいろいろとなつかしい思い出があるが、それはともかく、このような事情で、私に Veritas 執筆の白羽の矢

が立てられることになったのである。

ディズレイリの小説を論じたアーサー・H・フリッチは、彼のことを「怪物的な若者」(the monstrous young man)と呼んでいるが、文学と政治両面における超人的な活躍ぶりからみて、ディズレイリはまさに怪物的なヴィクトリア朝の大物の1人であった。

彼は1826年に最初の作品『ヴィヴィアン・グレイ』によって、一躍小説家として有名になった。そして1837年にトーリー党議員として初当選を果たして国会に進出したディズレイリは、党内に青年イギリス党を結成(1842)、その党首として精力的な活動を展開する一方で、『コニングズビー、または新世代』を書いた。彼の政治的理念を底流にして書かれた作品で、イギリスにおける政治小説は、これによってはじまるといわれる。ちなみにこの作品は、明治17年(1884)に、関直彦によって『春鶯囀』という題で翻訳されて、大変な人気を博し、政治小説流行の風潮を創り出したことがあった。

ディズレイリは、続いて『シビル、または二つの国民』(1845)、『タンクレッド、または新十字軍』(1847)を書いて3部作を完成、代表的政治小説家と目されるようになった。一国における極端な貧富の差を意味する「二つの国民」(the two nations)は、小説家としてのディズレイリによって創られて広まった語なのである。

ディズレイリはユダヤ系であったために、政界に進出してからは、はげしい偏見にさらされ続けた。彼は12歳のときから英国国教会に受け入れられていたのだけれども、彼の中にユダヤ人の血が流れていることに変わりはない。3部作最後の『タンクレッド』は、この意味で重要な意味をもつ。キリスト教との関係におけるディズレイリのユダヤ民族観の集成が図られているのである。

本コレクションは、ここにあげた作品はもちろんのこと、ディズレイリ最後の完成作品『エンディミオン』(1880)に至るまでの全作品を網羅している。彼の父親アイザック・ディズレイリの『文学珍談集』(第14版、1849)や、必ずしも彼の作品として認定されていない風刺詩『今日の愚人列伝』(M.サドラ序、1928)や『ラニミード書簡』(1836)、それに彼が息抜き半分に数回寄稿した、レディ・プレシングトン編『ヒースの美人画帖』(1838)なども洩れなく含まれている。

作品はほとんどすべてが初版を筆頭に、4~6種の多様な版をそろえているのも壮観だといえよう。なかでも注目したいのは、本コレクションに”The Right Hon. The Earl of Shaftesbury from the Author”という献辞のついた1834年刊4巻本の『コンタリニ・フレミング、心理的ロマンス』(初版は1832)が入っていることだ。献呈相手のシャフツベリ伯爵(第7代)は、工場法の導入、婦人子ども炭坑労働雇用禁止、煙突掃除少年雇用禁止、貧困階級の住宅改善等の慈善活動に力を尽くした政治家として知られる。社会改革という共通の基盤の上で、ディズレイリとシャフツベリとの間には緊密な関係が結ばれるようになったことを思えば、この献辞は多くのことを物語っているようで、甚だ興味深い。

ディズレイリは、3次にわたるダービー内閣の蔵相をつとめ、1867年第2次選挙改正法成立後に首相となった。そしてのちに再び首相に返り咲き(1874-80)、スエズ運河を買収、ヴィクトリア女王にインド女帝の称号を贈り、国内の公衆衛生、労働条件の改善に尽くすなど、輝かしい政治活動をくり広げた。

本コレクションの中に含まれているディズレイリの「国会改革に関する演説集」と、「過去30年間における保守党政策に関する演説集」は、彼の政治的キャリアを研究する上での不可欠の資料となるであろう。それにもう1つ見落とすことのできない演説の決定版がある。1873年11月に、ディズレイリがグラスゴー大学の名誉総長に選出されたのを記念して行った「就任演説」である。ヴィクトリア朝における出色の大学教育論だといえよう。

<図書館からのお知らせ>

●帰って来たヴィーナス

図書館本館1Fホール奥に佇んでいたヴィーナス像は、1964年(昭和39年)、ルーブル美術館所蔵の『ミロのヴィーナス』が日本にやって来た記念に、朝日新聞社が製作したレプリカで、当時の朝日新聞社会長上野精一氏より、山下薫子図書館事務長に贈られたものでした。長い間図書館を訪れる人々を静かに見守って来たこの像は、残念ながら1995年1月17日の阪神淡路大震災により破損してしまいました。以来、半端なものを置くわけにも行かず住人のいないままになっていたこの場所に、昨年8月、ヴィーナスが一回り大きくなって帰って来ました。新しい像の購入には、山下元事務長のご遺族よりいただいたご寄付を充てさせていただきました。



ミロのヴィーナス

●模様替え

春休みに図書館新館1階の模様替えを行いました。

図書館の蔵書検索へのアクセスを良くするために、参考図書コーナーの、入口に近い方

の書架2列を取り払い、蔵書検索パソコンをそちらに移動しました。そして、ソファでゆっくり新聞・雑誌をお読みいただけるブラウジング・コーナーが隣接しています。

蔵書検索パソコンがあった場所はレファレンス・コーナーに。“Veritas liberabit vos”、みなさまの真理探究のよりよいお手伝いをさせていただくための拠点にしたいと考えています。

また、情報検索コーナーのパソコンも増設いたしました。

それに伴い、参考図書コーナーに配架されていた参考図書のうち、パソコンによる情報検索でかなりの部分がカバーできるものを本館閲覧室に移動しました。どうぞ本館閲覧室をじっくりテキストを読み込む場所としてご利用ください。

図書館では、今後も利用者みなさまのニーズに即してサービス向上に努めていきたいと思っています。



図書館新館